

1. はじめに

教科書(『倫理』東京書籍)には、近代にかけて老いの価値観が変化したと書かれている。具体的には、近代以降の社会が生産的な生に価値をおくようになったことで、老いても若さを失わないことが重要とされ、立身出世し名声を獲た高齢者には権力と権威が与えられる一方、そうではない多くの高齢者は居場所を狭めることになったと述べられていた。

こうした記述からは、現代において一般的な高齢者へのイメージがネガティブに偏っていると考えられる。またその影響で高齢者の生活に何らかの困難が生じうるとも推察される。そこで本レポートでは、老いへのイメージがどのようなものかや、それが高齢者にどのような影響を及ぼすのかについて探究する。

⇒まずはここで、教科書や参考書などの中で興味を持った事柄について述べ、そこから考えたことと、この課題レポートではどのようなことを調べたいのかについて記述しました。

2. 老い・高齢者へのイメージとその影響

パルモアは、現代社会では高齢者に対して「知能が衰えている」「孤独」「病気がち」といった固定観念が存在すると明らかにした(Palmore, 1999 鈴木訳, 2002)。岩隈(2007)によれば、こうした否定的イメージは若年者が高齢者とのコミュニケーションを避けることに繋がり、仮に会話がなされたとしても幼児に話しかけるような、過度にゆっくりかつ単純な表現で話す形態をとりやすくなる。一方、高齢者に対するポジティブなイメージも存在する。パルモアは前掲書の中で「親切」「頼りがいがある」「知恵がある」といった高齢者への肯定的固定観念についても紹介している。

また、老いに対する固定観念は高齢者自身の中にも存在し、それが心身の健康に影響することも示されている。たとえば、高齢者自身が加齢に対してネガティブなステレオタイプを抱くと慢性的なストレスをもたらして病気や認知症になりやすくなり、ポジティブなステレオタイプは反対に、余命の延長および well-being や認知機能の向上と関連することが分かっている(岩原, 2018)。

ただし岩原は、高齢者の幸福や健康を考えるにあたって、老いへのネガティブイメージを無理に改めようとする動きに対しては疑義を唱えている。彼は「普通」の加齢には障害や機能不全が必然的に伴うものなので、加齢による様々な機会や機能の喪失から目を背けるのではなく、疾患や障害があったり完全な自立ができなかったりしても、老いと共生して精神的な健康を保つよう目指すことが重要だと主張している(前掲書)。

⇒「1. はじめに」のところで述べた、この課題レポートで調べたいことに沿って資料（図書や雑誌の記事）を読みました。

今回は①老いや高齢者へのイメージと、②そのイメージが高齢者にどう影響するかの2点を調べる必要がありました。①のイメージについては、調べてみると初めに想定していたネガティブイメージだけでなくポジティブイメージについてもまとめられていることが分かったのでそれについても記述しました。また、②のそのイメージが影響を及ぼすこととして、非高齢者の行動と、高齢者自身の健康や能力などについて書かれていたので、記述しました。全般的にネガティブなイメージが悪影響を、ポジティブなイメージが良い影響を及ぼすことが示されていましたが、資料を読み進めていくと、ネガティブなイメージの回避が必ずしも最善なわけではないことを知ることができたので、最後に追記しました。

3. まとめ

高齢者へのイメージには予想通りネガティブなものがあり、それが非高齢者との円滑なコミュニケーションを阻害している可能性もうかがい知れた。また、ネガティブなイメージが高齢者自身に浸透すると彼らの心身の健康を損なうことが分かった。他方、高齢者に対するイメージにはポジティブな側面も含まれており、そうした肯定的イメージを持つことが高齢者の健康や能力を促進することも明らかになっていた。ただし、加齢について過度にネガティブイメージを否定するよりも、加齢による変化を受容し老いと共生する姿勢が必要だという岩原の主張には説得力があると感じた。今後は、岩原の主張を実現するにはどのような手立てがありうるか、調べてみたい。

(1252 字)

⇒調べて分かったことを改めて記述し、まとめてみて自分が感じたことや、今回のレポートを踏まえて今後はどんなことを調べたいかなどについて書きました。

引用文献

⇒歴史思想系のサンプルとは記述形式が違いますが、必要な情報（著者名・書名（記事名）・出版社名・出版。雑誌であれば巻・号数、新聞であれば出版年月日、Webサイトを参照した場合はURLと閲覧日）が全て載っていて、一つの課題レポートの中で書式が統一されていれば、形式は自由です。

- パルモア,E(2002)『エイジズム：高齢者差別の実相と克服の展望』 鈴木研一訳 明石書店

→翻訳書なので、訳した人の名前も載せています。

- 岩隈美穂(2007)「障がい者、高齢者とのコミュニケーション」 伊佐雅子監修 改訂新版 『多文化社会と異文化コミュニケーション』 三修社

→一つの本の中に複数の著者がいる形式の本なので、引用した部分の章のタイトル(「」内)と筆者、また本全体の監修者・タイトル(『』内)を載せています。

- 岩原昭彦（2018）「サクセスフル・エイジングとオプティマル・エイジング」 日本心理会編 『心理学ワールド』 82 巻
→雑誌の中の記事なので、その記事のタイトル（「」内）と筆者、また記事が掲載されている雑誌名（『』内）と巻数を載せています。